# ニストは語る

# 〝風の芸術〟アコの魅力

「13歳の時、私はアコーディオンで生きていきたいと決めた」というアコニスト御喜美江。

日本ではまだアコファンにしか知られていないが、世界を舞台に活躍する屈指のアコニスト。

年に一度、休暇を利用して日本に里帰り。その間、日本ではコンサート、インタビューのラッシュ。その合い間をぬって、カザルスホール内の喫茶店でインタビュー。

聞き手は、作曲家、アコニストの松永勇次氏。

**松永**　はじめまして、リサイタルは聞かせてもらってますが、ぜひ一度お話ししたいと思っていました。よろしく。

**御喜**　こちらこそよろしく。

○○〜〜

## 13歳で決めた進路

**松永**　御喜さんは十三歳ですでにアコニストの道を決められてますね。それも西ドイツに留学というのだからすごいなって思ってました。四歳からですか始められたのは？

**御喜**　ええ、父が何か音楽をやらせようと思って他にも楽器を与えたらしいんですね、そしたらアコーディオンにとても興味を示したらしく、それではと言うので12ハーフのアコーディオンを与えてくれたんです。

中学にはいった頃ですね、どうしても本格的にもっと勉強したいって思ったんですが、それを満たしてくれる学校というと西ドイツにしかなかったんです。それで十三歳の時、まず行きました。

**松永**　十三歳といえば中学一年ですね、ドイツには知り合いがあったんですか、ドイツ語は？

**御喜**　その時はもちろん話せません。通訳の人と一緒でした。両親もとにかく一度見させた方がいいと思ったんですね。でもそのまま留まることは許してくれませんでした。

**松永**　まだ小さいということですか？

**御喜**　と言うよりも、まだ中学校二年。中学まではきちんと日本の教育を受けさせたいという教育方針ですね。

**松永**　十六歳で正式に西ドイツのトロシンゲン市音楽院に留学されますが、その時はもう許してもらえたんですね。

**御喜**　ええ。私も十三歳から十六歳の間に、アコーディオンもそうですが、語学はもう必死になってやりました。今度は当然通訳なんてつけてもらえないわけですし。とほ言ってもなかなかマスターできないで、そのまま行ったんです。でも、ドイツ語を話さなければ学べませんからね。必死な中で覚えていきましたね。

○○〜〜

## 簫の音色が好き

**松永**　留学されて、その翌年には「クリンゲンタール国際アコーディオンコンクール」青年の部で優勝、また翌年もと連続優勝されてますね。十六歳までの意志とレッスンのほどがうかがわれますね。

**御喜**　確かに必死にやったと思いますが、まだ十六歳ですからね（笑い）。

でも楽器は小さい時からやるに限りますね。

**松永**　僕自身アコの魅力にとりつかれた一人ですが、御喜さんにとってアコーディオンでなければ、というのは何でしょう？

**御喜**　アコーディオンというのは叩いたり、はじいたり、こすったりして出す音ではなく〝風〟なんですね。風で揺れたリードが鳴る音だというのが、私にとって一番の魅力です。

私は日本の楽器の簫（しょう）がとても好きなんです。あの音色はなんとも言えず好きです。アコーディオンの奏でる音もそれと似てるでしょう。

それとオーケストラのように演奏できる楽器。フリーベースで左手の短音がたせるとバリエーションも豊かにふくらむ、魅力ある楽器ですね。

**松永**　わかりますね。

でも、日本ではまだまだ人口の少ない楽器です。私たちがすすめているうたごえ運動は今年創立四十周年なんですが、いつも歌と一緒にアコーディオンがありました。

でも、近年、アコーディオンは伴奏楽器だけではない、もっと独自の楽器としての魅力を、とアコのコンサートを行なったり、僕自身がかかわっているんですが、昨年は七百名でアコーディオンのフェスティバルなどをやっています。

しかし、まだまだ人口は少ない。マイナーな楽器。いつか新聞のコラム欄で三大ネクラの一つに数えられてましたね。（笑い）

**御喜**　最初にアコーディオンが日本にはいってきたのは、クラシックの楽器としてではなかったので、なにか陽の当らない所の楽器だったというのが最初のイメージですね。

それに、まだまだ百六十年くらいという歴史の浅い楽器です。クラシックアコは三十年、とまだまだ人に知られていないんですね。

でも、日本はテレビでもなかなかアコーディオン登場しませんね。ピアノやギターの講座はあっても。もっとテレビで流せばみんなに親しんでもらえるのに。

○○〜〜

## 音楽土壌

**松永**　ドイツではどうなんですか？

**御喜**　ドイツはやはり、アコーディオンが一つの楽器として自立していますし、学校にもアコーディオンの専攻があります。

五つの国立音楽大学にはアコーディオン科があります し、小さな子どもたちを対象にした市立の音楽学校には必ずアコーディオン科があり、子どもたちが小さい時から習える楽器なんです。

楽器というのは二年三年でやれるものではありませんからね。小さい時からやれる土壌というのはこれからさらに発展していくことを保障してますね。

**松永**　確かに日本ではそういう学校として系統的に追求していく場がありませんね。独学で、あるいは教室に通ってやっている人たちへのアドバイスを。

**御喜**　アドバイスというより私はまず、独学している人たちがアコーディオンの音楽会を聞ける機会をなるべくふやしたいと思いますし、楽器っていうのは、まず、あこがれ、が大切だと思うんです。あこがれて初めて楽器というのは学びたいと思うんで、あこがれてもらえるようないコンサートをしたいと思いますね。

○○〜〜

## 日本人の作曲

**松永**　僕は御喜さんのコンサートやレパートリーにいつも注目するのは、クラシックはもちろんですが、日本の作品もよくとりあげておられますね。そのことの思いは？

**御喜**　さっきも少し言いましたが、日本の歴史には雅楽の楽器の中に簫という楽器があります。これは世界最古のリード楽器なんです。四千年以上歴史のある楽器です。そういう古い伝統のある楽器を持つ国の作曲家が曲をかけばヨーロッパの作曲家の書くものとはちょっと違ったイメージでてくるのではないかとお願いしています。いい作品がいっぱい生まれています。そういった日本のリード楽器のオリジナル作品を外国に紹介するのも大変意義のあることだと思うんです。

**松永**　御喜さんは作曲は？

**御喜**　私はダメです、才能ありません（笑い）。

（5面につづく）

▲御喜さんの里帰りに同行。来年日本でのピアノリサイタルも決まっている夫君のゲオルク＝フリードリッヒ・シェンク氏と

## アコニスト 御喜美江さん

〈御喜美江・みきみえ〉アコニスト

一九五六年九月十五日、東京生まれ。四歳の時からアコーディオンに親しみ、伴典哉、マリアンヌ・プロプストに師事。

十六歳で世界最高のアコーディオン科を持つ西ドイツのトロシンゲン市立音楽院に留学。翌七三年、七四年と「クリンゲンタール国際アコーディオンコンクール」青年の部で連続優勝。また、七四年には「アムシー国際アコーディオンコンテスト」でも、二重奏の部一位。その後も、ハノーバー国立音大ピアノ科で研さんを積み、八一年に卒業。同年から、デュイスブルグのル国立音大アコーディオン科の講師となる。

日本でも、一九七七年、岩城宏之指揮の札幌交響楽団定期演奏会に出演以降、毎年帰国しては意欲的なコンサートをつづけている。

スカルラッティやクープランから彼女のために書かれた新作まで幅広いクラシックアコーディオンの第一人者として世界的に支持を得る。

ジュネーブ、オランダ、アメリカ、中国等でも公演。

レコードも多数、フランスバロックのクープラン、ラモー、ダウンの作品のレコードなど。日本では「アコーディオンシーン」（フォンテック）が好評。

# 世界のアコ

# 松永勇次のとまらぬインタビュー

インタビュアー＝松永勇次（作曲家、アコニスト）

センターレコーディングスクール講師、アコーディオンの教育、演奏などフリーの音楽家として活躍。作曲多数。

静岡合唱団なかま入団、うたごえ運動に参加。歌劇「沖縄」作曲グループとしても活躍。

中央合唱団芸術局長、音楽センター芸術局長、アンサンブル・ケーナ音楽監督。ソ連、ベトナム、SSDⅡ（第2回国連軍縮特別総会）など外国公演にも参加。「ピースウェーブ」作曲者。日本のうたごえ常任委員。

（4面からのつづき）

○○～

## アコは女性的な楽器

松永　そんなことはないでしょうが。ところで、アコーディオンは僕のもそうですが、ずいぶん重い。女性の場合は男性と比べて大変だと思うんですが？

御喜　肩からベルトをかけ、腰のところでぎゅっと閉めて、全体ではだっこしているようにして弾くので、その姿もそうですが、体全体で、体の一部のような感じで演奏するようなもので、私はイメージとしては女性的な楽器ではないか、と思うんですよね。弾いている時はあまり重さは感じません。

私の楽器は二四キロくらい、ケースも含めるとかなり重いんですが、普段は車で運びますからあまり感じませんが、日本の電車、とくに階段の多いのには困りました。演奏が終わってからならまだいいんですが、演奏前に自分で運んだりしたら、手がしびれて演奏になりませんね（笑い）

（インタビューには、今度、カザルスホールでリサイタルをすることになったという夫君のピアニスト、ゲオルク＝フリードリッヒ・シェンク氏も同席。『日本語話せなくて申し訳ありません』と御喜さんを通じてにっこり）

松永　ご主人は同じ大学でお知り合いになったとか？

御喜　（笑い）ええ。

松永　同期だったんですか？

○○～

## 夫婦でレッスン

御喜　いえ、ずっと先輩です。彼とは大学のピアノ科で知りあったんですが、私はアコ科を終えてピアノ科にはいり直しましたから、年は三歳違いですが、ずっと先輩です。

松永　ご夫婦で音楽家ですね。それぞれにレッスンは何時間くらいされるんですか、一日に。

御喜　私は三時間くらいです。彼はレパートリーも多いし、コンチェルトの曲も多いからもっとたくさんしてますけれど。

松永　お互いの音が気になりませんか？（笑い）それとも励ましに？

御喜　田舎ですから、家だけは広いんですよ。だからお互いに邪魔にはなりません。

松永　住宅事情がちがいますネ。もう御喜さんにとっては日本の生活よりドイツでの生活の方が長いですね。

御喜　そうですね。年齢から言えばちょうど半々ですが、生活という点ではドイツの方がもう長いですね。

松永　日本には三月に毎年帰られるのは？

御喜　大学で教えてますから、三月しか休みがとれないんです。で、三月は里帰りも兼ねて、帰国します。

○○～

## ぜひ、うたごえとの共演を

松永　うたごえ運動創立四十周年の記念祭典を来年二月に東京で開くんです。今年の十一月にも第二回のアコーディオンフェスティバルも計画しています。私どもの集まりにも、ぜひ出演のチャンスをつくって下さい。御喜さんのアコーディオンをみんなに聞かせたい。

御喜　まあ、ぜひ参加したいと思いますが、とにかく大学は二月というのは一番忙しく、その時、休暇とろうものならクビです。（笑い）長期休暇は三月の四週だけ。

松永　残念ですねえ。外国公演なんかの時は？

御喜　ええ、正式に大学を通じて来るものは。ヨーロッパは比較的近いのであまり問題ないんですが。中国に行く機会は多いです。

松永　ドイツの大学は勉強厳しいですか？

御喜　大変厳しいです。でも、授業料はありませんから学ぶために、学びたい者の意志と力さえあれば。意志と勉強が必要ですね。

○○～

## 黒衣裳の秘密

松永　なるほど、御喜さんを通じて、ドイツの音楽観、少し味わった気がします。最後に一つ。いつも黒の衣裳が多いですね、とてもステキです。（笑い）

御喜　ありがとうございます。（笑い）スマートに見える効果と、万一ちょっとよごれてもすぐに着替えに帰らなければならないといったことがないからですよ。（笑い）

松永　（笑い）なるほど。次回のコンサートでまたお目にかかります。

今日はどうもありがとうございました。

▲松永勇次氏

▲御喜さんのリサイタルチラシより
3月21日サントリーホール、オープニングシリーズ

# ミュージック・ウェイ

## ミュージカルの逸品

「ママ・アイ・ウォント・トゥ・シング」

昔むかし、巨人、大鵬、卵焼きといった時代がありました。女、子どもの好きな物です。

今や女性の好きな物といえば、バーゲン、クレープ、ミュージカルといったところで、本当にミュージカルが花盛り。

でもあれは、本当にそんなに面白い物でしょうか。セリフをしゃべっていたと思ったら、突然うたい出す。あの必然性の全く無いトーツさが照れ臭くて、かと思うと突然、踊り出す。私は目のやり場に困ってしまう。

そのあげく、で結局なんだったの？　というストーリーで、半端な夢から覚めたように、劇場の外の雑音の中に放り出される。

でも中には、ごくタマにですけれど、「これは絶対にミュージカルでなければいけないのだ」という、優れた作品もあります。女、子どもの好きな物なんて言っていないでぜひとも男性諸氏にも見て頂きたいような、素晴らしいミュージカルがあるのです。

私、これをニューヨークで見た時には、本当に感動しました。場所もおしゃれなブロードウェイじゃなくて、ハーレムのはずれの古い小さな劇場で、ちょうど昼間の興業だったので、観客は地元の小、中学校の黒い子どもたちが大半でした。

物語はハーレムで育った黒人の女の子の話で、教会の聖歌隊から、やがてポップな大シンガーになって行く女性の物語です。

これは今回来日のメイン・キャストとして出演しているドリス・トロイの半生をベースにしたものですが、教会出身の黒人シンガーといえば、ドリスだけではなく、アレサ・フランクリン、マーヴィン・ゲイ、ボビー・ウーマック、サム・クックなど、もう枚挙にいとまがないというか、アメリカ音楽の背骨である黒人の主だったシンガーのほとんどは教会の聖歌隊の出身です。

つまりこのミュージカルは、アメリカの重要な大衆音楽そのものの半生でもあるというわけで、狂言回しをつとめるのが、舞台左手にしつらえられたブースの中の女性DJなんです。

だから話の進行が解りやすいし、出演者の歌が、どれもアレサ・フランクリンかホイットニー・ヒューストンかといった達者さで、歌手をやっている人が見たら、その日から恥ずかしくてうたえなくなるんじゃないか、というほどの見事な歌を聞かせてくれます。

タイトルは、「ママ・アイ・ウォント・トゥ・シング」。そう、最近はTVコマーシャルにも使われているブラック・ミュージカルですけれど、主演のディアトラ・ヒックスという、やっと二十歳になったかならないかの女性が、本当にイヤになっちゃうほど素晴らしいんです。

このミュージカル、六月四日から七月二十四日まで、東京、福岡、大阪、名古屋、札幌で上演予定ですから、普段は私と同じように、ミュージカルに大して興味の無い方も、ぜひにとおすすめ致します。ほんと、一聴の価値がありますよ。

湯川れい子（音楽評論家）

▲「MAMA, I WANT TO SING」のレコードジャケットより

# がやいてるネ!!

## 40周年・東京のこの人

みんなにジャンボさんと親しまれている。

身長一八〇㌢、あまりしゃべらない実行型。ジャンボといえば、ダンボといえば、ぞうさん。今、〈ぞうれっしゃがやってきた〉の顔として、大奮闘しているこの人、服部安宏さん。

## 今年のジャンボ もちろんダンボ

服部安宏さん

うたごえ三十周年の時、名古屋から上京して、もう十年。今年から中央合唱団の事務局長としても、三合唱団合同演奏会東京公演の成功めざしがんばっている。

「東京でもすでに大小十以上のぞうれっしゃが走っているが、みんな武道館までいき、千名の合唱を成功させたい」と今年の祭典への決意。

保母のうたごえ代表の（山北）敦子夫人と共に今年も、また一段と忙しく輝いています。

中島修一（日本のうたごえ祭典事務局次長）